

## 6 腎不全保存期の不安の比較 — 面談前後で STAI を用いて —

飯田市立病院 腎センター 佐藤なをみ、久保田みゆき、川島好子  
座光寺艶香、仲田美智子、木下富喜子

### 【はじめに】

昨年の研究での課題から、保存期患者の不安が軽減するためには、透析看護師が関わる事が必要とわかった。福西氏は「腎不全患者は、腎不全である事実を主治医から告知され、透析治療の必要性を心理的に受け入れ、そして実際の透析治療にうまく順応できるようになるまでに時間を要する。」と述べている。この事から、継続的な関わりが必要と考える。

今年度は引き続き、保存期の患者へ関わる方法として、定期的に面談を行う事を考えた。この方法を行う事で保存期の患者の抱えている不安がどのように変化するか、面談・質問紙を行いながら内容の評価をすると共に、関わる前後での不安の変化を STAI テストを用いて数値的变化を知りたいと考えた。

### 【対象及び方法】

#### 1) 研究期間

2003年05月06日～08月23日

#### 2) 研究対象

市立病院内科通院中の患者で、透析告知を受けた患者 12名

#### 3) 方法

①対象患者へ事前に電話し、質問紙・STAI テスト(1回目)の協力を頂けるか確認

②①で電話した14名中12名へ郵送

③質問紙全員回収後記名されていた10名の面談時間割作成。

・月1回の診察日の待ち時間(約1時間)を利用する。

④面談スタッフは固定し行う

・質問紙・面接ガイドに基づき聞き取り調査  
・指導については、「インフォームド・コンセント」を使用  
・面談後は記録に残す

佐藤 なをみ 飯田市立病院 看護部 腎センター  
〒395-8502 飯田市八幡町 438 0265-21-1255

⑤面接後帰宅後に STAI テスト(2回目)を行う

⑥面接3週間後に質問紙・STAI テスト(3回目)を郵送し調査

⑦面接前後で、不安の変化を比較する

4) 用語の操作上の定義

STAI テスト：不安測定のための最も基礎的な尺度  
特徴は状態不安と特性不安に分けてある  
状態—個人が今現在どれくらい不安があるか

23以下：非常に低い 24-33：低い 34-44：普通  
45-54：高い 55以上：非常に高い

特性—ストレスを受けた時、個人がどれくらい不安になるか予測する

### 【結果・考察】

#### 質問紙結果から

『透析知識を深めるために何をしてほしいですか』の質問について、昨年今年共に同様の結果で、透析看護師から話が聞きたいが一番多かった。(図1参照)

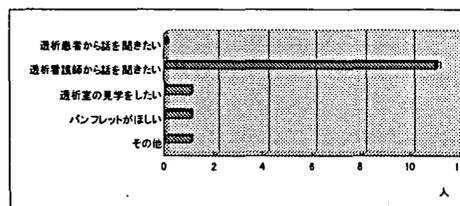


図1 透析知識を深めるために何をしてほしいですか

それに対して『透析についての情報はどこから入ってきますか』の質問については、面談前では「入ってこない」と回答されていた方が3名いたが、面談後には9名全員の方が入手先を「看護師」と回答している。これは面談前の質問紙で、透析看護師から話が聞きたいと12名中11名の方が要望しておりその成果と考える。保存期の患者は正確な透析の情報を求めている事がこの結果からもわかる。1回で終わるのでなく、面談を継続していく事が必要と考える。アンケートに記名が無いため2名の方は、面

談を行っていないが「看護師からの話は聞きたい」と要望はしているので、時期をみながら介入方法を検討し情報を提供していく必要があると考える。

『シャントについて何をやるものか知っていますか?』の質問について、「わかる」と回答があったのは、面談前では12名中3名あり、内2名はシャントがある方であった。面談後には9名中8名の方が「わかった」と回答があり「わからない」と回答があった1名に確認すると「名前は知らなんだけどその事なら知ってる」との事で、理解度に差はあったが面談後は全員が理解できていた。面談後にシャント作成術を行った方が3名おり、形成外科の医師から詳しい説明を受けた事で理解も深まったと考えるが、面談では、パンフレットを一緒に見ながら患者個々のペースに合わせ説明できた事も理解できた事の一つと考える。

『自分の病気について相談できる相手がありますか。』の質問で面談前の質問紙では、12名中5名が相談相手が「いない」と答えており、面談後には9名全員の方が相談相手に「看護師」を上げている。

表2 相談できるようになった方との関係

	面談前	面談後
配偶者	5	4
子供	1	1
両親	1	0
同僚	1	0
上司	0	0
友人	0	1
看護師	0	9
その他	2	1

これは、月に1回・1時間以上の時間をかけて話を聞く事で、自分の思いを表出する場ができた事と、正確な情報を入手できる場ができたことから全員が看護師を相談相手に選択していると考えられる。そして改めて家族を交え面談を行った4名中3名の方は配偶者・子供も相談相手に上げており、これは、患者が家族に相談を持ちかけるきっかけになり、自分の事を理解してくれる人が増えたからと考える。家族からも「透析がこんなに大変な事とは知らなかった。一緒に聞いて良かった。食事もできるだけ事はやってみます。」「家族の協力は必要ですね。みんなで一緒にやります。」などの言葉をもらった。患者本人にしてみたら力強い言葉になったと考える。

#### STAIテストから(表3・図2)

症例数が10名、それと研究方法通りに進められた症例が少なく、統計的な事は言えないが、2・3回の面談回数では、不安の数値が下がる患者は少ないと言える。しかし、STAIテストを行った事

で、患者自身が言葉には出せない内面的不安が、数字で知る事ができた。(A氏参照)

表3 面談施行前後 STAI での変化一覧表

	性別	面談前	面談直後	面談3W後
A氏 83歳	男	58	61	59
B氏 67歳	女	50	58	42
C氏 66歳	女	55	63	69
D氏 89歳	男	69	58	57
E氏 57歳	男	57	53	53
F氏 70歳	男	78	61	79
G氏 63歳	男	50		37
H氏 73歳	女	70		52
I氏 58歳	男	43	36	導入
J氏 38歳	女	54	50	50

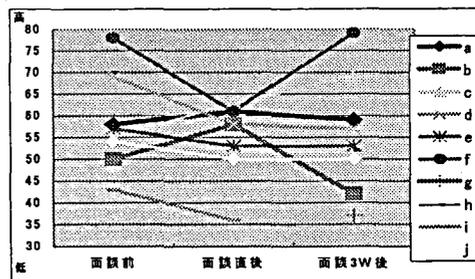


図2 STAI グラフ化したもの

#### 面談結果と STAI テスト

A氏のSTAIテストの状態不安では、大きな変化はなかった。面談前・2回目の質問紙からはいずれも不安の言葉が書かれており不安の強さが伝わってきた。しかし1回目の面談を行ってみると、質問紙とは違い「大丈夫。なんとかなる。」といった様な、短絡的な発言も聞かれ、1週間後にはシャント作成術の入院となった。その際妻の透析に対する不安が強かったため、退院後に家族を含めて面談を行った。3回目の面談でも「仕事と経済面の事が解決すれば何の心配も無い!癌と言われるよりいいな。大丈夫。」と笑いながら話され、こちらの質問には話を逸らし、本人の葛藤や不安を表出してもらう事ができなかった。この結果から、STAIでの変化が見られなかったのは、①特性不安の数値は「非常に高い」を数値が示しており、気質的な事が影響を受けているという事。②面談・質問紙からは、内面的には不安はあるのにそれを上手に表現できていないため。③透析の知識不足からの不安が、実際に透析の具体的な情報が入手された事による具体的な不安が出現したと考える。

研究期間中に透析導入になったI氏では、STAIテストの状態不安は低くなっている。導入前では「透析の事は考えたくなかったし関係ないと思ったのかもかもしれない。情報も必要ではなかった。」と

述べている。導入後は「以前に透析の話聞いていたので、安心してた。今の所不安はない。家族にもわかってもらえて、なんだか楽になったなー」と言葉が聞かれ、導入1回目からコンソールや、ルートに触れたりして興味を示していた。シャント作成から導入までの入院が長かった事もあり、病棟訪問も頻回に行い情報交換を行った事から、スムーズな導入につながり、STAIでも不安が低くなった症例であった。

面談時家族から聞かれた言葉

10名中7名家族と面談行う

- ・透析がこんなに大変とは思わなかった
- ・初めて聞く事ばかりでびっくりしました
- ・話が一緒に聞けて良かった
- ・食事の事もできるだけやってみます
- ・家族の協力が必要ですね
- ・みんなで一緒にやっています

導入となれば、今までの生活スタイルを全く変えなければならない。患者・家族の協力、そして医療者の関わりがなくては、今後の透析生活を受け入れていけると考える。今回の研究では、家族には重点を置いてなかったが、結果から保存期の患者へ関わるには、家族の巻き込みは不可欠とわかった。

今回アンケート・面談を行って、不安の内容の変化を知る事で、透析のスタッフが今後保存期の関わりを続けていく必要性を再確認した。面談を行って保存期患者の生の声を聞き、精神的ストレスの大きさを痛感した。福西氏は「告知の内容を理解できるようになると、死に対する不安や恐怖、将来の不安が顕在化する。」と述べている。この事からも患者の心理のプロセスを理解し、その都度新たな不安や精神的葛藤を表出してもらう場所を提供し継続して関わっていく事が不安の軽減にもつながっていくと考える。

【結語】

- ・ 期間、症例数が少ないため STAI に関しては統計的な変化はなかった。
- ・ 保存期の患者に継続して関わる事は大切であり、家族を巻き込む事が重要である。

【参考・引用文献】

- 1) 西村めぐみ：慢性腎不全患者の透析療法に対するイメージ、日本看護学会論文集、第31回成人看護II：117-119
- 2) 福西勇夫：透析導入をはさんでの心理的变化、透析ケア、Vol.5,34~37, No.10 1999
- 3) 大野呂和栄ら：血液透析患者の精神症状、第16回成人看護（福岡）1985年
- 4) 石崎博之：導入期にある慢性腎不全患者の血液透析療法の体験と意味づけ、H13年度長野県看護大学大学院看護学研究科修論
- 5) 長尾貴子：保存期と透析導入後のMSWの役割、透析ケア、Vol.5,38~43, No.10 1999